

山と博物館

第35巻 第8号 1990年8月25日 大町山岳博物館



コバイケイソウ 北ア旭岳にて 撮影 '90.7.31 渡辺逸雄

白馬岳登山雑感

渡辺 逸雄

終戦後間もない大町中学(現大町高校)の二年生の夏、白馬岳大雪溪の実測図面を作るため先輩や同級生数名で、五十坪の間縄とクリノメーターを使って一日がかりで測量しながら登った。遠く佐渡ヶ島や能登半島と、その夜の日本海へ沈む真赤な太陽を夢心地で見とれてしまった結果、「白馬岳のトリコ」となり、あげくの果てに二夏も毎日ポッカをやってしまった。また燕岳の燕山荘ではグリーンパトリールの腕章をしてのバイトで二夏を過ごし、爾来自称山男となってしまう。

おかげ様にこの年まで体調もよく、毎年三四回は山へ行くが、近年どの山でも「オバタリアンパーティー」と、ママゴンに引ずられたパパと息子が娘のファミリーパーティーと、シルバートパーティーがやけに目立つ様になった。ひと頃のドデカイ横長の特大キスリングとアルミナベでシゴカれている若者の姿は殆どお目にかかれない。時代は変わったもんだとつくづく思う。ドライブ、サーフイン、パラグライダーetc楽しむことはいくらでもある。苦勞して汗をかくなでことに今は若者は見向きもしない。

先日白馬岳へ高山植物の写真を撮りに登りながらカメラの重さに堪えかねて「息子でも助手にして身軽に写真でも撮っていられたらなあ」なんて思ってみたら、自分自身がシルバートパーティーであることに気付いておかしくもあり寂しくもあり、変な気分の山行きで、こんな気分は初めて味わった。齡かな?

何年もかかってためた高山植物のスライドが友人に貸せたまま行方不明になってしまったのが、今回の撮影という目的をもった山登りになった訳であるが、山へ登ること以外の目的をもった山行きは昔のポッカ以来これも初めてである。植物も写真も素人で苦勞した割に不出来だったが、踏荒しに気を遣い、稜線では風防に苦勞したり、うちわとこうもり傘をリフレクターの代用品にしたり、結構楽しい初体験事項ばかりの山行きであった。

(大町市在住)

ハクビシン

中村 一恵

近頃ハクビシンという動物名を出しても、「エッ!、それ何?」とはあまり言われなくなった。それほどハクビシンという動物が身近な存在になってきたというのであろう。あちこちで車に轢かれて昇天するものが続出しているし、収穫間近となったミカンやトウモロコシ、スイカといった農作物を食い荒らすから、農家の人にとっては「にっくき奴」。今や忘れたくとも忘れにくい動物となっている。しかし、片や天然記念物に指定して珍獣扱った県もあり、ベットにして可愛がっている人も現にいる。

表丹沢県民の森(神奈川県秦野市)の県立登山訓練所でハクビシンが餌付けされたと聞いて行ってみた。夜の七時半頃から出てくるというので待ってみたが残念ながらその夜は姿を見ることはできなかった。訓練所の管理人の話によると、インスタントラーメンを食べに毎晩のようにやって来るということである。翌朝、谷筋に通じる排水溝の泥の上につきりとハクビシンの足跡が印されていたから、山小屋に近づいてきたことは確かである。餌のラーメンも食べられていた。もっとも、タスキもラーメンめざしてやってくるということだから、餌がなくなっていたことがハクビシンの現れた証拠とはならなかったが。

訓練所は勘七ノ沢と四十八瀬川という二つの溪流の合流地点にある。典型的なハクビシンの生息環境となっている。神奈川県でハク

ビシンが初めて記録されたのは一九五八年である。西丹沢の山北町大又沢で幼獣が捕獲されている。やはり沢沿いの山地であった。

最初に発見される場所が山奥であるところから、かつてハクビシンは深山幽谷の動物と呼ばれたこともあった。江戸期の「類聚名物考」所載の雷獣図なるものこそはハクビシンだと主張する研究者も出てきた。おそらくは戦前のことであろうが、動物学者の高島春雄によると、一部の毛皮業者の間で「ライジュウ」の名で取引されていたということである。ラーメンを食いに山小屋に出没するとは、雷獣のイメージも地に落ちたものである。このほか、ハクビシンには、現在では使われていないタイワンタヌキとかハクモウテンなどさまざまな呼び名があるが、その由来についてはすでに書いた(文献二)のでここでは繰り返さない。

ハクビシンは海を渡れた?

ハクビシンは動物学者をも悩ませている。人間が持ち込んだ動物だ、いや、昔から日本にいた動物だと、未だに議論は絶えない。この問題を考えるには、彼らの分布圏のもつ歴史性を押さえておく必要があるだろう。分布の特徴をみてみよう。

ハクビシンはジャコウネコ科の動物で、この科には十八属あり、そのうち七属がアフリカとマダガスカル島に生息するほかはすべて東南アジアに分布している。ハクビシンは一

分布圏の拡大を示す。ハクビシンの分布は、中国南部から東南アジアにかけての広範囲にわたる。主要な分布地は、中国南部、台湾、海南島、インドネシア、フィリピン、ジャバ、スマタラ、ボルネオ、マダガスカル島、アフリカ、マダガスカル島に生息するほかはすべて東南アジアに分布している。ハクビシンは一

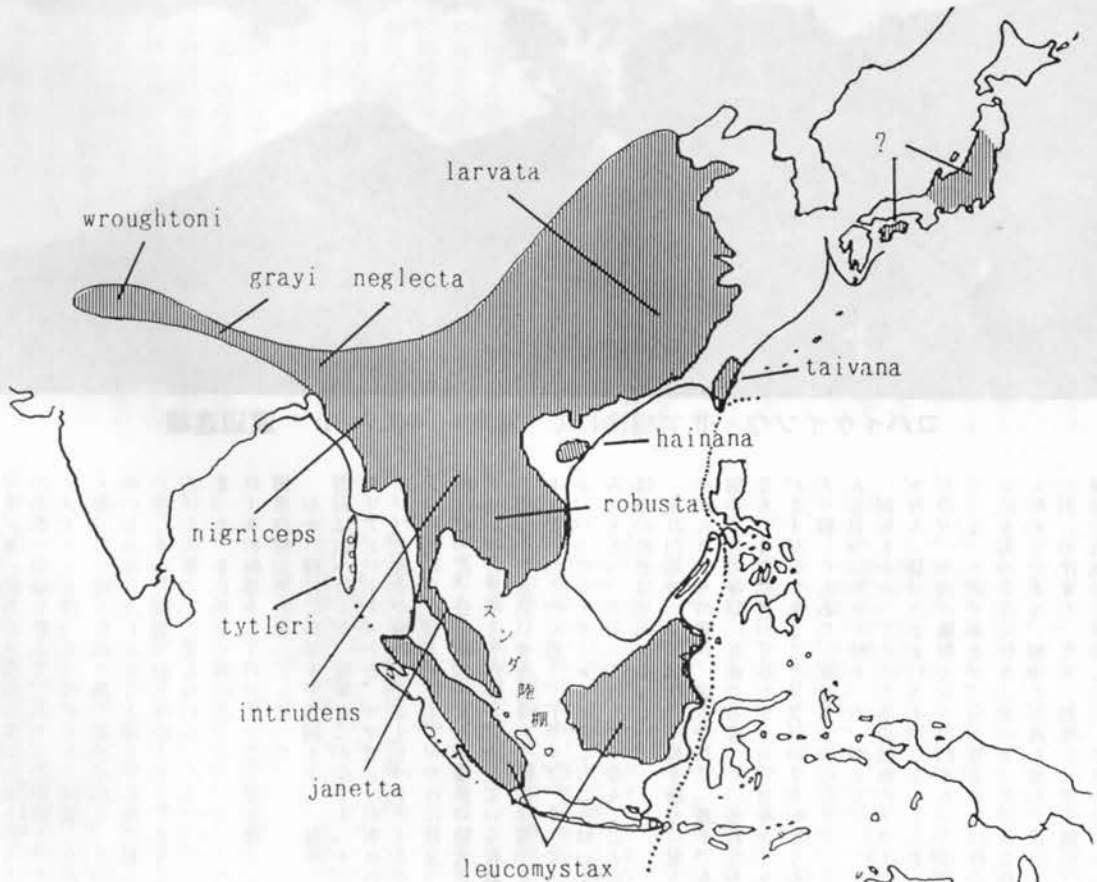


図1. ハクビシンの分布 学名は主要亜種の地理的位置を示す 日本産亜種名は未決定

属一種で、東洋熱帯に分布の中心がある(図1)。
図の海上に引いた実線に注目していただきたい。

最近の深海底堆積物の研究によると、過去七十万年の間に約七回の寒冷期とその間の温暖期が存在したことが知られている。その変動はきわめて規則的で、約十万年の周期で起きている。最後の氷期(ビュルム氷期)は約十萬年前ごろから始まり、二・三回の小温暖期を繰り返したのち、今から二万〜一万八〇〇〇年前に極寒に達した。氷期には水が氷として陸上に固定されるため、著しい海面低下が起こる。最終氷期の最寒冷期には海面が一〇〇〜一三〇メートルも低下したといわれる(文献二)。

そのため、スマトラ・ジャワ・バリ・ボルネオ・パラワン等の離島は大陸と陸続きとなった。これが実線で示されたスンダ陸棚(スンダランド)である。この地域ばかりでなく、台湾島から九州を取り囲む地域、すなわち現在の東シナ海も広範囲に陸化した。したがって、理論上、ハクビシンは東シナ海をトコトコ歩いて九州あたりにたどりつくことができた。ところが、四国を除いて南日本からハクビシンの記録は得られていない。

台湾には、ハナジカ、タイワンカモシカ、タイワンツキノワグマ、タイワンザルというそれぞれニホンジカ、ニホンカモシカ、ニホンツキノワグマ、ニホンザルに近似種もしくは同一種の別亜種が分布するから、ハクビシンが日本に生息しても、生物地理学上の矛盾はない。しかし、これらの動物はすべて九州にも生息する。ハクビシンの現在の分布域は、四国のほか、東北・関東・中部の各地方で、

かんじんの九州からの報告は未だにない。もし、ハクビシンが在来種であれば、これはどう考えても不自然なことである。

図2は神奈川県産の比較的若い個体の顔を示したものである。日本産ハクビシンの典型的な顔つきと考えていただいでよい。分類学者は、日本産のハクビシンの頭骨や顔の斑紋の特徴が外国産のものとは一致し、一致しない、だから日本のものが外来種とは考えにくい(文献三)、こう主張するわけである。地理的分布からみて、系統上日本のハクビ



図2. 日本産ハクビシンの顔の斑紋

シンに最も近い位置にあるのは、台湾や中国の亜種(*taivanu* および *laravela*)とみるのが常識である。タイワンハクビシンは台湾本島、緑島、紅頭嶼に分布する(文献四)が、日本産ハクビシンの頭骨の特徴は紅頭嶼産とは明らかに異なる(文献五)という。だが、比較対象として紅頭嶼産を選ぶのは、はたして妥当なことだろうか。紅頭嶼は台湾本島の台東の東南八十キロにある島で、蘭嶼ともいう。

ハクビシンは台湾から持ち込まれた?

今度は、図1の点線に注目していただきたい。

周知の通り、生物地理学では、典型的なアジア型動物相で占められる地域と、典型的のくずれた古いアジア型動物相の占める地域との境界をウォレス線と呼ぶ。フィリピン諸島の生物相を調べたメリルは、ウォレス線の北への延長はミンドロ海峡を通り、ルソンと台湾の間を太平洋へ抜けるとした。これがメリル修正線と呼ばれるものである。その後、紅頭嶼の陸上生物を調査した鹿野忠雄(文献六)は、ウォレス線をもっと延長して台湾本島と紅頭嶼の間に引くべきだと主張した。これが点線で示したウォレス・メリル・鹿野線である。図からわかるように、ハクビシンはこの生物地理学上の線を超えられなかった動物である。だが、一カ所だけ超えたところがある。それが紅頭嶼である。

紅頭嶼の生物相は台湾本島とは著しい相違があり、むしろこの島はフィリピン系の生物が優勢な地である。一方、台湾本島の低地の生物相は、大陸のミニチュア版といってよいほど中国大陸との類似性が高い。それはなぜかという点、台湾と中国大陸が対峙する台湾

海峡の水深は三五メートル程度の浅海で、氷期には台湾本島は大陸と陸続きとなってしまう。そのため、中国大陸から台湾本島へ、また、その逆もあつたであろうが、生物の移住が自由に行われたであろうからである。ところが、台湾本島と紅頭嶼の間の海峡は二〇メートル以上の深い海となつていて、少なくともビュルム氷期には大陸と陸続きになることはなかったから、陸上の生物の移動は本島と大陸間ほど自由ではなかったはずである。

しかし鹿野忠雄は、生物地理学的な考察に基づいて、古い時代の台湾・ルソンの両地域から供給されたと結論づけた。そうであればハクビシンは台湾本島から陸橋つたいに紅頭嶼に渡れたことになる。しかし仮にそうであっても、台湾本島から隔絶された年月は相当古いものであつたろうから、この島のハクビシンが台湾本島のものとは変わっていない(文献四)のは不可解である。紅頭嶼のハクビシンが自然分布であるならば、鹿野忠雄は、紅頭嶼産をはっきりハクビシンだとは言っていない。台湾産ハクビシンに近似の種が分布すると述べているだけである。分類学的にきちんと調べられているのだろうか。

以上長々と書いたのも、紅頭嶼産頭骨と比較して、日本産のものは台湾産とは異なる結論づけてしまつてよいのか、を言いたかつたためである。本島産との十分な比較調査が望ましい。頭骨の特徴はともかく、顔の斑紋はすでに指摘されたことだが(文献三)、台湾産に最も似るようである。大ききの点でも、中国大陸産は明らかに大形であり、日本産はむしろ台湾産のものに近いようである(表1)。筆者は外来説をとっているが(文献七)、

表1. ハクビシンの計測値比較

産地	亜種名	N	頭胴長(mm)	尾長(mm)	耳介長(mm)	後足長(mm)	出典
台湾	taivana	?	480-500	370-410	36-39	73-75	高輝亭(1987)
日本	?	♂12	547.6±24.1	413.7±19.6	44.7±3.7	81.3±5.4	鳥居(1987)
		♀10	499.1±32.5	397.6±19.5	41.6±4.4	77.0±3.6	
中国大陸	larvata	♂4	604.5	462.5	55.0	91.5	高輝亭(1987)
		♀8*	581.4	467.0	52.4	86.6**	

*耳介長および後足長についてはN=7。 **原著記載にあった68mmの1例は除いた。

ハクビシンを人間が持ち込んだとすると、台湾-日本の間は最も成立しやすかった輸入ルートであったろう。一八九四-九五年の日清戦争以来、一九四五年に日本が太平洋戦争に

敗れるまでの五一年間、台湾は日本の植民地統治下に置かれていたことは周知の事実である。台湾に移り住んだ邦人は現地でハクビシンのことを「タヌキ」と呼んでいた(文献八)。タイワンタヌキという異名は台湾で生れたのかも知れない。

ハクビシンの未来は明るい?

ジャコウネコ類は第三紀の初頭に出現し、現在の多くの食肉類の祖先であるミアキスに似て、かなり原型的な食肉類の形質を留めている。言い換えれば、食肉類の中にあつて特殊化していないグループが、ジャコウネコ類ということになる。

生物の世界に絶対はない。「大きい、小さい」、「早い、遅い」、「賢い、愚か」等等、あらゆる相対的である。特殊化も同じく、相対的な概念である。ジャコウネコ類と比較して初めて、ネコ類は形態や生態が特殊化していると言えるのである。ネコ類はジャコウネコ類と違って雑食性ではないし、犬歯が発達し、瞬発力を武器とした狩りに長ける。

特殊化に対する概念は一般化である。生物学で言う一般化とは、「推定される祖先型からほとんど分化せず、特定の生息場所や生活様式に特別に適応していない」ことである。多くのジャコウネコ類がまさにそうである。ほとんどのものが未だ樹上生活を送り、祖先型のように短い足をもつ。ハクビシンの歯並びを眺めると、この動物が、ネコ科の動物のような優れたハンターとは思えない。頭骨の大きな割りには、犬歯などはとても貧弱で、バリバリ獲物を噛み砕くには向いていそうにもない。事実、神奈川県産で調べられた食性(文献九)をみても、餌としている

のは甘味のある液果やオサムシやゴミムシ類など地上性の昆虫が主で、雑食性である。

マンモスが絶滅したのは、あまりに牙が大きくなりすぎ、無用の長物と化したからだといわれるが、これは皮相な見方である。彼らの絶滅に人類の狩猟圧が取りざたされているが、そればかりではないだろう。巨大化すれば、トラやライオンもそうだが、栄養要求や生息場所が繁沢となる。そうした形質を備えた生物が急激に絶滅するという結論を、マンモスが示したにすぎない。

自分の固有の生活の場と行動型を作り上げることが、場が安定しているときは強みである。だが一方で、特殊化すればするほど、そのシステムは環境の変動に対する柔軟性を欠くことになるだろう。巨大化するような特殊化は、系統が繁栄し、やがて絶滅するといった、長い進化過程の後期から末期に具現している。

極端な特殊化は身を滅ぼす。だから、生物の進化とは、一言で言ってしまうと、「いかに特殊化から逃れるか」である。そして「一般化する」ことで種族は若返るが、古生物学の教えるところによれば、それは、体形がプリミティブ(基本的または原型的)で特殊化していない、食肉類で言えば、ジャコウネコ類のようなグループから常に出発する。

進化の極致に達したトラやライオンのような動物は確かに美しい。けれども、進化的柔軟性に富むのは、特殊化した大形ネコ類ではなく、特殊化していない、ジャコウネコ類のような小形の動物なのである。変化に強いのは、ハクビシンのような、一見、「ダサク」に見える動物なのだ。イヌ科の中では、タヌキがそうであろう。

引用文献

- (一) 中村一恵・石原龍雄・坂本堅五・山口佳秀 一九八九 神奈川自然誌資料十号。
 - (二) 松島義章 一九八八 氷河時代。日本百科全書十九巻。小学館。
 - (三) 今泉吉典 一九八九 どうぶつと動物園四一卷五号。
 - (四) 高輝亭等編著 一九八七 中国動物誌 獣綱第八巻食肉目。科学出版社。
 - (五) 今泉吉典 一九六〇 原色日本哺乳類図鑑。保育社。
 - (六) 鹿野忠雄 一九三五一三六 地理学評論十卷十一-十二号、十二卷一-二、十一-十二号。
 - (七) 中村一恵 一九九〇 スズメもモンシロチョウも外国からやって来た-帰化動物と日本の自然。PHE研究所。
 - (八) 徳田御稔 一九四四 大東亜の動物、哺乳類・南方編。精華房。
 - (九) 松本丈人・浜口哲一 一九九〇 神奈川自然誌資料十一号。
- 表1に示した数値は、文献(四)のほか、鳥居春巳(一九八七)「ハクビシンの生態とその防除について(講演資料)」より引用した。
- (神奈川県立博物館)

山と博物館第35巻第8号

一九九〇年八月二十五日発行

発行所 長野県大町市 TEL0260-2211
大町山岳博物館

印刷所 長野県大町市後町
大町タイムス印刷部

定価 年額 一,二〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号(長野)一三三一九三三